

Sylvia's Lovers: 自己、他者、赦し

宮田裕三

序

かつてのElizabeth Bennetと同様に、*North and South*のヒロインMargaret Haleは最初、偏見と反発から将来の伴侶となる男性を誤解したが、その後、自らの認識の誤りに気づき、その男性と和解を果たして結婚する。「見えなかった」ヒロインが「見える」ようになって、世界は調和を予感させて閉じる。

*Sylvia's Lovers*においても、ヒロインは認識の変化を経験するが、それは結婚後、夫が失踪してからのことであり、しかも「見えなかった」ものが「見える」ようになったヒロインが夫と和解をする時を迎えてもそれは束の間のことではなく、夫は間もなく息を引き取り、残されたヒロインは悲嘆に暮れる。ヒロインの認識の転換は永続的な調和と平安には至らないのである。この小説がGaskellの長編小説の中で最も陰鬱な作品として位置付けられる所以である。¹「6月の一番初めに咲く薔薇のように愛らしい」(115)²とか「行く先々を照らす太陽のよう」(115)と称されるように青春を謳歌する観のあったヒロイン³が、以前の面影がすっかり影を潜めてしまうほどの急激な変貌を遂げる。本稿では、この点について、ヒロインの自己、及び他者との関係、そしてそのことに関連する「赦し」の問題を中心に考察したい。

父と娘（個と社会）

この小説は1790年代に時代を設定した「歴史小説」としての性格を持っており、その当時の、国家権力を後盾とした強制徴募隊が物語を展開させる大きな動因の一つになっている。その強制徴募隊に対するそれぞれの登場人物の反応を通して、個と社会との関係の様々な問題が浮かび上がってくる。

Sylviaの父Daniellは「船員、密輸業者、馬の仲買人、農夫」(37)と職業を転々

と変えて行った「冒険精神と変化を好む」(37)変わり者で、固定した社会の階層秩序の構成員として定住している訳ではない。何時でも社会の枠の外へはみ出して行く可能性を秘めた人間である。実際、彼は、国家や法によって自己犠牲を強いられることには絶対に承服しない。例えば、強制徴募隊の活動内容は合法的な行為で国益に適ったものであると言うPhilipに対して、‘ Nation here! nation there! I’m a man and yo’re another, but nation’s nowhere. ... I can make out King George, and Measter Pitt, and yo’ and me, but nation! nation, go hang!’ (42)と激昂して反論する。ダニエルには目にするのでできない抽象的な「国家」の存在を信じることができない。社会との関係の中で自己の存在を相対化できない彼にとって、自己の願望充足こそが常に唯一最大の関心事なのである。彼にとっては自己そのものが絶対的な基準、即ち法と化しており、国家権力であろうと彼自身の法に触れるものは排除し、断罪することを躊躇しない。この信念がやがては徴募隊の集会所襲撃にまで彼を駆り立てて行き、彼はこの事件の首謀者とみなされて、死刑に処せられることになる。ダニエルの死は、自己を絶対化し、著しく平衡を欠いた過激なまでの個人主義を追求する生き方に隠されている不毛性を象徴するものと言える。

このような徹底的な自己の世界への固執は娘のシルヴィアにも受け継がれており、物語の開始早々、シルヴィアが外套を初めて拵える時のエピソードに彼女の性格の一端を垣間見ることができる。この時、従兄フィリップの勤める洋品店で彼女は母親なら「地味な」(30)色を好むだろうと想像しながらも、フィリップの勤める「グレー」を拒否してあくまで「赤」にこだわり、自分の意志を貫徹するように、彼女は社会の保守的な因習に無条件に従うことはなく、明確に自己主張する面を持ち合わせていることが窺える。また、このエピソードが進行しているのと同じ頃、町中を徴募隊が兵士として強制的に駆り集めた捕鯨船の船員達を連行して練り歩いていた。その時、連行されている男達の中に自分の夫の姿を認めた女性の悲痛な叫び声を耳にしたシルヴィアは自制心を失って、異常な興奮状態に陥る。「私達は何もすることができないの？助けに行きましょう。おとなしくじっとして見てなんかいられないわ。」(31)と声を大にして怒りを露にするシルヴィアにフィリップは「これは法律であり、誰も逆らうことはできない、とりわ

け女性たちは。」(31)と諫める。彼女のヒステリーは、たとえ社会に認められた合法的な行為であっても、彼女自身から見れば不当としか思えない行為に対して、フィリップの言う社会的に無力な女性が外部に向かって無意識に示した反応であり、そこには彼女の何らかの潜在的な意志が反映されていると解釈できる。つまり、父ダニエルと同様に強烈な個の持ち主であり、彼女もまた権力や法に対して盲目的に追従する人間ではないのである。シルヴィアを制止しようとして「法」を持ち出すフィリップは社会体制の従順な擁護者であり、個人の人間的な感情よりも社会秩序を優先させる点でダニエルやシルヴィアたちと対峙する存在となっており、このことがそもそもシルヴィアが最初から生理的にフィリップを嫌い、避けようとしている一因となっていると考えられる。

一方、ダニエルと同様に冒険精神に富み、国家権力の代行者である強制徴募隊に我が身の危険を顧みずに歯向かっていくKinraidは、フィリップとは対照的に社会の外側の住人のように見える。だが、強制徴募隊に連行されていざ軍人になると、戦功を立てて‘commander’にまで昇進したり、1万ポンドの持参金を持った金持ちの女性と結婚して、名誉や富を着実に獲得していく世渡りの巧い人間であることから判るように、彼は社会の内側にしっかりと留まっており、決して社会と対立することはないのである。

ところで、シルヴィアは父ダニエルの激しい気性を確かに受け継いでいるが、「たとえ自分が傷つけられたことでも時間が経てば忘れ、相手を赦した」(305)父とは対照的な側面を備えている。裁判でシルヴィアの父に不利な証言をしたために彼を死刑に追いやったことが原因で村八分にされ、困窮の果てに最期の時を迎えようとしているDick Simpsonが、彼女に会いたいとフィリップを通して懇願する時、彼女はフィリップにどんなに強く促されても、断固として会見を拒否する。シンプソンに会って赦してやるようにと言うフィリップに向かって‘It’s not in me to forgive, I sometimes think it’s not in me to forget.’(303)と答え、フィリップの言葉を聞き入れようとしない。‘It’s said in t’Bible, Sylvie, that we’re to forgive.’ ‘Ay, there’s some things as I know I niver forgive; and there’s others as I can’t and I won’t, either.’ ‘But, Sylvie, yo’ pray to be forgiven your trespasses, as you forgive them as trespass against you.’(304)この小説の結末

への伏線となっている会話であるが、この場面だけでなく作品の随所で 'I'll never forgive' という言葉を繰り返すシルヴィアは一度他者を断罪し、他者との関係を断ち切ってしまうと、関係の修復の可能性を永久に閉じてしまう非情な意志の持ち主である。ただ、この頑固な態度は半面、時の経過と共に移り変わって行くものを嫌い、一貫して変わることのないものを希求する意志の現われとも考えられる。「目の前にあるものに強く影響され、目の前から消えてしまうと忘れてしまう」(228)父ダニエルとは違い、他者との関係で一度自己が下した評価・判断は、たとえその対象が目の前から消えても、時間・空間の隔たりを超えて堅持し続ける彼女の特性は、当然愛に於いても発揮されることになり、キンレイドが溺死したとされ、フィリップと結婚した後までも、キンレイドに対する愛を抱き続ける。そして、彼女のこの「絶対に忘れない」強固な自己をフィリップが見誤ってしまうことが、悲劇をもたらす導火線になるのである。

シルヴィアと恋人たち（自己と他者）

シルヴィアは友人Molly Corneyとの会話の中で初めてキンレイドが話題になった時からキンレイドに大きな関心を示し、何時の間にか磁気に引き寄せられるようにキンレイドを愛するようになる。そもそもシルヴィアにとってキンレイドは現実世界での実体を持った等身大の人間ではなく、強制徴募隊を相手に自らの命を惜しまず捨て身で仲間の船員達のために戦って負傷した「ヒーロー」(69)なのである。賞賛の対象としてのキンレイドはその意味で理想化された偶像と化している。キンレイドに撃ち殺された徴募隊の隊員達にも彼らの帰りを待ちわびている両親がいるだろうとフィリップが指摘しても、光り輝く偶像の美しい側面しか見ていないシルヴィアは真剣に受け止めようとしなない。

氷山の一角が崩落して、その下に留まっていたボートが、繋ぎ止めていた鯨と共に一瞬にして海中に没してしまった話とか、氷山の壁の割れ目の奥から赤や黄色の炎が噴き出している地獄の入り口を目の当たりにしたというような現実世界の出来事とは思えない航海上の冒険譚をキンレイドから聞いて、シルヴィアは心を奪われる。日常の世界から遠く隔たった北方や南方の夢のような世界とキンレイドとがシルヴィアの意識の中で重なり合う。シルヴィアがキンレイドの磁気に惹きつけられるのは、キンレイドが彼女の世界とは全く異質の世界の住人、即ち

他者として映るからである。シルヴィアにとってキンレイドはロマンティック・ヒーローに他ならないのである。

他方、前述したように、物語の開始早々からシルヴィアがフィリップを嫌い、避けようとしていることが再三示されるが、それは、フィリップがシルヴィアの属する世界と同一の世界の住人であり、その世界の秩序体系を守ろうとする「法」の体現者であるからである。言い換えると、シルヴィアの自己は外側の世界に憧れようとする願望を持っているのに対して、彼女の‘mentor’ (126)であり‘chaperon’ (126)でもあるフィリップは彼女を自分と同じ世界の中に留めようとしているからである。願望とは自己に欠落しているものに気づくことで生じる。キンレイドが彼女の属する世界とは異質の世界の住人として彼女の意識の中で映った時、彼女の自己はその異質の世界、即ち他者に憧れ、これと結びつくことで自己の世界を充足させることを欲するのである。確かに、キンレイドの実体は、数々の若い女性を弄び、中には捨てられた悲しみの余り死んでしまった犠牲者もいるような非道な誘惑者であるが、シルヴィアにとってキンレイドは外の世界から自分を迎えにやって来た使者としての意味しかなく、外の世界を象徴する偶像であれば十分なのである。この時点で、シルヴィアがキンレイドの実体に目を向けようとしなないのは当然であろう。⁴

シルヴィアはフィリップを嫌っているが、フィリップの方はセクシュアルな存在として「いつもシルヴィアを見つめている。」(43)彼にとって彼女は「人の揚げ足を取り、気紛れで、強情で、横柄で、陽気で、魅惑的な」(301)女性なのである。「堅実で」(47)、「無口で、質素で、禁欲的な」(113)フィリップがシルヴィアに惹かれるのは、自分に欠落している要素をすべてシルヴィアが備えているからである。つまり、シルヴィアはフィリップにとって自己とは異質な他者性の象徴であって、この他者と結びつくことで彼は自己の世界を補完し、充足させることができるのである。そして、フィリップは「世界で唯一の女性」(121)であるシルヴィアを「自己の内奥の大切で神聖な場所に飾っている。」(121)つまり、シルヴィアがキンレイドを「ヒーロー」とみなして偶像化したように、フィリップもまたシルヴィアを「偶像」(311)化していることになる。しかし、偶像は所詮偶像であって、何時かは倒壊する運命にある。シルヴィアを自己の欲望で塗り固めたために彼女の実像を見失ってしまい、キンレイドが目の前から消え去って、

時間が経過すればキンレイドのことをシルヴィアは忘れてしまいうだろうと身勝手に判断したフィリップは、キンレイドへの思いを断ち切れないシルヴィアがフィリップとの結婚と引き換えに自己を抹殺して抜け殻のような状態になってしまうことは予想し得ないことだった。結婚してやっとの思いで手に入れた現実のシルヴィアと、自己の欲望の世界の中で作り上げていた偶像のシルヴィアとの大きな落差をフィリップは思い知らされる。偶像を手にしようとして嘘をついた代償は余りにも大きかった。⁵ 手にした瞬間に偶像は消失していたからである。

赦すこと、赦されること

「私は決して赦さない」という言葉をしばしば口にするシルヴィアは、前述したように、父に不利な証言をしたシンプソンが死期を迎えて彼女に会うことを懇願しても、両者の間を執り成そうとしたフィリップに向かって‘ I tell thee my flesh and blood wasn't made for forgiving and forgetting. ’ (304)と断言して憚らない。証言は自発的な意志によるものではなかったにせよ、そのことを悔い改め、シルヴィアに赦しを求めているシンプソンに対して、彼女は父を死に追いやった敵として憎悪の火を燃やし続けるのであるが、他の人間との関係でも、シルヴィアはその気性の激しさ・執念深さを見せる。例えば、父の死後、フィリップが頻繁にRobson家を訪れるので、父の使用人だったKesterからフィリップとは恋仲なんだろうと皮肉混じりに言われると、‘ If thou wasn't Kester, I'd niver forgive thee. Niver. ’ (281)とケスターに釘をさす。そして、何よりも特徴的なのは、キンレイドと再会して、フィリップの欺瞞が暴露された時、シルヴィアはフィリップについて‘ I'll make my vow now, lest I lose myself again. I'll never forgive you man, nor live with him as his wife again. All that's done and ended. He's spoilt my life... ’ (348)とキンレイドに宣言する。しかも、フィリップの失踪後にシルヴィアがJeremiah Fosterの許へ相談に訪れた時、この誓いに関してジェレマイアから「罪」(373)であり、「悪」(373)でもあると諭されても、彼女はこの誓いを撤回しようとはしない。たとえ、「罪」を背負うことになっても自己に頑固に忠実であろうとするのである。

シルヴィアが「赦さない」と言う時、その確固たる拠り所としているのは彼女自身の「法」である。その「法」とは、前述したように、一貫して変わることの

ないものを希求する彼女の、自己の連続性に対する信念とも言い換えることができるだろう。従って、この「法」に基いた裁きは修正・変更されることはなく、裁かれた他者はその罪を決して赦されることはない。不変性を何よりも重視する彼女は、人が「悔い改める」ことで新しい自己に変わり得ることを決して認めようとしないのである。自己の「法」に照らし合わせて有罪と宣告した他者を自己の世界から永久に追放し、二度と関係を修復することのないシルヴィアは、揺らぐことのない絶対的な確信を自己に対して抱いている。しかし、この姿勢は、例えば『マタイによる福音書』18:21-22で「その時、ペトロが近寄って来て彼に言った、『主よ、私の兄弟が私に対して罪を犯した場合、私は何度まで彼を赦すべきなのでしょう。七度までですか。』イエスは彼に言う、『私はあなたに、七度までなどとは言わない。七の七十倍までだ。』⁶と示されているようなキリスト教の根本的な精神 神の無限の「赦し」に背馳するものであろう。⁷「絶対に赦さない」というシルヴィアという言葉は、畏れを知らない神への挑戦とも解釈できるだろう。

シルヴィアはまた、フィリップの心の奥深い場所の祭壇に飾られた「偶像」であることから、フィリップにとっては神に等しい存在である。そして、フィリップとシルヴィアとの関係の特質は、フィリップが神であるシルヴィアに常に「赦し」を求め続けることにあると言えるだろう。典型的な例として、結婚後、キンレイドが生きている夢を見たと思わず口にするシルヴィアをフィリップが詰る時、彼女の無言の非難を向けるような表情を見た途端、彼は自分の発した言葉を後悔し、ベッドに横たわる彼女の許に跪く。

Now he rushed to the bed on which she lay, and half knelt, half threw himself upon it, imploring her to forgive him; regardless for the time of any evil consequences to her, it seemed as if he must have her pardon—her relenting—at any price, even if they both died in the act of reconciliation.
(323)

横たわるシルヴィアにフィリップが「赦し」を請うこの構図は、小説最後の場面と対照的なものになっているが、二人の関係は上記のように象徴される位置関係

を保ち続ける。確かに、フィリップと結婚したシルヴィアは家父長社会に組み込まれ、夫に対して「無条件に従順な」(328)妻として尽くしてはいるが、意識の根底ではフィリップの方がシルヴィアの目を気にしているのである。

しかし、やがてキンレイドが財産を持った女性と結婚して、全幅の信頼を置くことのできない人物だということが判った時、シルヴィアは彼女の自己にとってまさしく存在の根拠である一貫性の維持を、自己の延長であるかの如くキンレイドにまで要求していたことが間違っていたことを思い知らされることになり、その時まで信じて疑うことのなかった自己への確信が揺らぎ始める。しかも、自己の「法」に拠って断罪したフィリップの中に実は不変の真実が埋もれていたことを発見することになり、シルヴィアは自己の過ちに気づき、苦い認識の逆転を迫られる。

After she had learnt that Kinraid was married, her heart had still more strongly turned to Philip; she thought that he had judged rightly in what he had given at the excuse for his double dealing; she was even more indignant at Kinraid's fickleness than she had any reason to be; and she began to learn the value of such enduring love as Philip's had been...(443)

そして、死の床にあるフィリップが「赦し」を求めた時、シルヴィアは‘ Oh, wicked me! forgive me—me—Philip! ’ (453)と初めて彼女自身の非を認めて、他者に「赦し」を請い、これまでの両者の位置関係が逆転することになる。他者を「赦し」、他者から「赦される」ことで、それまで断たれていた他者との繋がりが蘇生し、自己の世界は膨らみ、充足する。この最終的な和解の場面で両者は互いを「赦し」、両者の関係は再生を果たすが、フィリップの死によってそれは一瞬にして消え去ってしまう。⁸

他方、フィリップの側に目を転じるとどうであろうか。キンレイドが強制徴募隊に連行されたことをシルヴィアには告げず、彼女がキンレイドの溺死を信じるに任せ、最後にはキンレイドの死という言葉を自ら口にしてしまったような、シルヴィアの信頼を裏切る行為が、当のシルヴィアの目の前で明らかにされた時、

「私を憐れみ、赦してほしい」(347)と懇願しても当然彼女は一向に聞き入れる様子を見せないため、「私の人生は終わった」(347)と嘆き叫ぶフィリップは、家庭を捨て、これまでの過去の人生から自分を切り離し、死の機会を与えてくれる場として海軍に入隊する。シルヴィアのシルエットを除いて全財産を妻子に遺し、過去の自分を葬り去ろうとしたことは間違いないであろう。だから、彼は Stephen Freeman という新たな名前を用いて、文字通り “a free man” となったのである。⁹

しかし、新兵を募集している目の前の下士官を眺めながら、フィリップは、戦場で輝かしい戦功を立てて、今の自分とは対照的に「陽気で活発な」(355)男として生まれ変わって戻って来たらシルヴィアの愛を獲得することができるのではないだろうか、と未だに未練がましい打算を働かせる余地を意識の片隅に残していることも事実である。つまり、この時点では自分を完全に捨て去っている訳ではない。だが、軍艦上の突発的な爆発事故の不幸な犠牲者となって、顎の骨が砕かれ、顔面の下半分が黒く焼け爛れるような大怪我を負った以上、まぶしい英雄として帰還し、シルヴィアの愛を手にするという密かな思いは完全に断ち切られてしまい、彼は初めて失意のどん底に陥るのである。

No more chance for him, if indeed there ever had been any, of returning gay and gallant, and thus regaining his wife's love. (410)

このように、フィリップはシルヴィアに「赦してもらいたい、愛されたい」という願望を終始一貫して抱き続けている。¹⁰傷痍軍人として帰国した時も、重い病に罹り死期の迫った仲間のJemを迎えにやって来た妻子を見て、フィリップは我が身と重ね合わせ、妻のやさしい愛に包まれて死を迎えることのできる友人に強い「羨望」(413)を抱く。さらには、養育院で読んだ、妻の胸に抱かれながら死んでいったSir Guyの物語に触発され、何時かは自分もサー・ガイのように抱擁され、赦しを得て死ぬことができるかも知れないと思うと、矢も盾もたまらずにシルヴィアのいるMonkshavenへ帰ろうと決心するのである。

そして、高波に攫われた我が子を自分の命と言わば引き換えに助けた後、身を

横たえて死を迎えようとしている時に駆けつけて来たシルヴィアに向かって、‘ I did thee a cruel wrong... I see it now. But I’m a dying man. I think that God will forgive me—and I’ve sinned against Him; try, lassie—try, my Sylvie—will not thou forgive me?’ (448)と「赦し」を請うが、この時、既に自己の過ちに気づき、フィリップの「永続的な愛」(443)に目覚めていたシルヴィアがフィリップの求めに応じない訳はない。ついに、フィリップはシルヴィアの「赦し」と「愛」を得て、自分の希望する通りの形の死を迎えることができたのである。フィリップとシルヴィアの「愛」の関係には「赦し」の問題が絶えず纏わりついてきたが、この場面でやっと解決を見ることになる。しかも、フィリップは愛する他者から「赦し」を与えられるだけでなく、絶対者の神からも「赦し」を得て、二重の意味での充足を見出している。

だが、フィリップに‘ Will He ever forgive me, think yo?’ (449)と尋ねるシルヴィアはたとえ神からの「赦し」を与えられても、自己の真の充足と平安を得たとは言い難い。再三言及しているように、彼女は自己の律法に絶対的な確信を持ち、この非情な「法」を拠り所にして、過ちを認め「赦し」を請う他者を頑なに拒み続けてきた。その激しいエネルギーは、過失を犯した他者だけではなく、過ちを犯してしまった自己にまで当然仮借なく向けられるだろう。固定した自己像の維持に固執し、変化する余地を決して容認することのなかったシルヴィアは、自己の認識の変化を皮肉にも余儀なくされた結果、彼女自身の「法」に拠って過去の「邪悪な自己」(453)を容赦なく責め立てるに違いない。小説末尾の後日譚で、シルヴィアがフィリップの死後「いつも喪服に身を包んだ、顔色の悪い、悲しそうな」(454)女性として余生を送り、しかも「娘が成長しきらないうちに亡くなってしまった」(454)ことが読者に明らかにされるが、瑞々しい若さの横溢したかつてのシルヴィアと同一人物であるとはとても思えないほどの哀れな変容がその後の彼女を暗示しているようである。「私は生きている限り決して彼を赦さない」と言いきって自己の意志を貫き、他者(フィリップ)を死に追いやったという苛酷な事実は、彼女の心の中で決して消えることはなかったはずであり、彼女は自己の魂の煉獄の中で過去の自分を責め続け、贖罪の日々を重ねて行った結果、ついには若々しい生命力を消耗させてしまったのである。そして、それ故

に、*Sylvia's Lovers*はGaskellにとって「私が今までに書いた最も悲しい物語」¹¹となったのである。

